



「人が集い、ともに支えあい、絆をはぐくむまち」を実現するために 令和6年度に北区が力を入れて取り組む特色ある事業をご紹介します

■ 未来につなげる人材育成

中学校部活動に対し、各分野の専門家を派遣するとともに、区内小・中学生を対象にクラシック等の芸術鑑賞会を通じ、本物に触れる機会を提供し、本格的な施設等を活用したイベント等を開催することにより、自分の夢や目標を見つけ出し、未来につなげる人材育成を行う。

- 部活動の支援や芸術鑑賞会
事業費:4,814万円



■ 安全で安心できるまちづくり

防災マニュアルの策定や防災訓練の実施を通じて、マンション内のコミュニティの形成を支援する。

- マンションコミュニティづくりの支援
事業費:434万円



■ 放置自転車対策

放置自転車の多い場所・時間帯に、啓発指導員を集中して配置し、自転車利用マナーの啓発や空いている駐輪場への案内を行うとともに、地域に応じた放置自転車対策を、各機関と連携して総合的かつ効果的に推進する。

- 放置自転車対策事業 事業費:2,138万円



など

■ 地域福祉と子育て支援

地域福祉コーディネーター・コミュニティソーシャルワーカーを配置し、関係機関と連携して支援する。不登校やひきこもり等の課題を抱える家庭に対し、スクールソーシャルワーカー等を活用し各支援機関と連携して支援する。

- 住民主体の福祉コミュニティづくりの推進
事業費:3,342万円
- 子育て支援事業
事業費:6,113万円



■ 万博に向けた機運醸成の取組

官民連携により、各企業等の強みを活かし、万博テーマに沿った新たなアイデアを創造・発信するブースを「パピリオン」等とした「夢キタ万博2024」を実施する。また、「夢キタ万博2024」では、出展者と参加者が交流できる仕掛けを取り入れ地域力の強化を図るとともに、ファッションデザイン体験など、大阪・関西万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」の実現に向け発信し、地域全体で万博への認知度・関心度を向上させる。

- 万博に向けた機運醸成の取組
事業費:3,613万円



令和6年度の予算の詳細は北区ホームページをご覧ください



政策推進課 電話 06-6313-9976 FAX 06-6362-3821

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

私たちのSDGs④

地球規模の環境問題や社会課題の解決も、まずは一人ひとりの小さな実践の積み重ねから。毎月、区内の様々な活動をお伝えします。

子どもたちのふれあい体験事業



北区地域活性化事業推進センター 三島保さん

外に出にくい子どもたちが 自然に親しみ交流を広げる機会に

2月10日の朝、北区役所前を出発した2台のバスは滋賀県栗東市へ。合わせて90人を超える子どもと保護者らがいちご狩りを楽しみ、馬やポニーと触れ合いました。

障がいなど様々な事情で外出が難しい子どもたちが自然に親しむ機会に、と北区地域活性化事業推進センター主催で開催する「子どもたちのふれあい体験事業」。立ち上げからけん引してきた三島保さんは「とにかく外に引っ張り出してやりたい、という思いで続けてきました」と話します。

十数年前、京都府京丹波町の農家と知り合った三島さん。芋や枝豆の収穫に通ううち、「子ども食堂に来る子らを、ここに連れて来たいと思うようになって」。そんな時、北区の社会福祉協議会(社協)からも、社協が支援する子どもたちが外に出るきっかけを作りたいとの話があり、京丹波町での収穫体験が実現しました。

「長靴を知らない子がいて驚いたことも」と振り返る三島さん。様々な課題に直面しては、一つひとつ解決してきました。2年前から、春のいちご狩りを加えて年2回のツアーが定着。一斉にお弁当を食べるのも、子どもたちには貴重な経験です。保護者同士の交流も生まれます。行程には障がい者が働く職場の見学や利用を組み込み、将来の就業につなげる工夫も。いつも定員を上回る人気ですが、「大きくし過ぎて顔の見えないものにはしたくない」と話します。



京丹波町の畑で芋掘りを楽しむ参加者

〈目標〉
3 **すべての人に健康と福祉を**
あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する
《SDGsチャレンジ》
始めたことを、細く長く続けていこう

ある年、長く家に引きこもっていた女子中学生が参加。別れ際、「1人で行動する自信ができました」とあいさつして帰っていきました。「当たり前のことやってるだけ」と話す三島さんですが、「その言葉を聞いた時は、やっぱり涙が出たね」



誰からも憧れられる ドローンレーサーに



橋本勇希さん

然上手く飛ばせず、悔しくてのめり込みました。「もともとラジコン好きでゲーム好き。コンマ1秒が勝負を分けるレースの緊張感も好き。2年ほどで、これしか自分に向いてないと思うようになりました」

橋本さんのドローンは、フレーム、プロペラ、モーターなど各パーツを組み立てる自作です。はんだ付けもすれば3Dプリンターも活用。スピードと操作性を求めて改良を重ねます。航空法や電波法を学ぶ必要もあり、「時間さえあればドローンのことを考えて何かやっている。周囲には天才と言われるけど、努力だと思ってます」

まだマイナーな競技ゆえ、孤独な闘いでもあります。そんな中、近所のラジコン店の店長が、法律のことから機体のことまで教えてくれました。練習時間を確保するために通信制高校を選ぶにあたっては、中3の担任が背中を押してくれました。最初は反対していた両親も、遠方の練習場への送り迎えなどをサポート、今や一番の応援団です。

目標は世界一。でも、それだけではありません。橋本さんは「ドローンの魅力は答えがないこと」と語ります。飛ばし方もセッティングも人それぞれ。「世界一になっても仕事としては成り立たないけど、アメリカには21歳でドローンフレームのブランドを持ち、起業して撮影も手掛けるレーサーがいるんです」

近く活動拠点を中国に移します。日本より練習環境に恵まれ、レーサーの層も厚い国で、自分なりの答えを探るシーズンが始まります。

コントローラーを操作して、ドローンに付けたカメラの「目」で空中を飛び、設定されたコースでの速さを競うドローンレース。ルネサンス大阪高等学校(芝田2)2年の橋本勇希さんは昨年、年間ポイントを競う国内大会で総合チャンピオンとなり、大きな国際大会でも優勝しました。「この1年で、本気で世界一を取りに行く自信がついた」と話します。

中学に入学して入ったドローン部は、コロナ禍に家の中で楽しもうと設けられた部活でした。初めは全



所属チーム「RAIDEN RACING」で国際大会に出場する橋本さん(左端)

北区の魅力は?

個性的な人のいる個性豊かなまち



You Tube▲

夢・キタ・ひと

24

高校生ドローンレーサー
橋本勇希さん